

# シビックプライドを醸成する都市環境

東京理科大学 理工学部 建築学科 教授 いとう かおり  
伊藤 香織

## シビックプライドとは何か

シビックプライド (civic pride) という言葉を聞いたことがあるだろうか。「都市に対する市民としての誇り」を意味する言葉だが、単なるまち自慢ではなく、「ここをより良い場所にするために自分自身が関わっている」という当事者意識にもとづく自負心、という意味がある。英英辞典を引くと、civicは「町や都市や地域に関わる人々の義務や活動の」という意味を含み、prideには「その人自身の達成したこと、近しい人々の達成したこと、幅広い賞賛を受ける資質や所有物によって引き出される深い喜びや満足の感覚」という意味がある。日本語にするとニュアンスが消えがちだが、「市民」には権利と義務を持ち活動する主体としての市民という含意があり、「誇り」は自らに密接に関わりのある事柄やなし得たことから引き出されるという含意がある。このことから、シビックプライドという言葉の意味が窺える。

シビックプライドは市民社会のベースとなる。一人ひとりに社会と関わるモチベーションとインスピレーションをもたらし、自発性を引き出す。国家のような大きな枠組みより、目の前に現れている身近な地域（都市やコミュニティ）の方が「自分ごと」になりやすく、また自分の為すことに対する効果が直接実感できるため、それが自負に結びつく。だから、ナショナルプライドよりシビックプライドの方が個々人の矜持に結びつきやすい。

近年、日本の都市政策、都市運営においてシビックプライドという言葉が使われることが急激に増えてきているが、特に英語圏では従来一般的に使われてきた。シビックプライドは、総称としては「地域市民がいかに関わりたいかを特徴付けコミュニティとして自らを代表せしめるか、地方自治体がいかに場所を治め振興するか、人々がいかに地域に関わり地域に介入するか」に関わり、市民感情の観点からは「特定の場所に対する強いレベルの愛着や忠誠心、そしてそれに付随して、強いアイデンティティと所属の感覚」とも説明されている<sup>1)</sup>。「自らの市民としての責務に対する個人の誇りの感覚」<sup>2)</sup>「コミュニティの感覚」<sup>3)</sup>「公共善」<sup>4)</sup>という言い換えもされており、その意味の広がりが見られる。一方で、強すぎるプライドによって盲目的な態度に陥る危険性も指摘されている。

これらから、シビックプライドには、地域参画、地域アイデンティティ、忠誠的愛郷心、地域愛着など多様な側面があると言える。

## シビックプライドの歴史

イギリスでは、シビックプライドはヴィクトリア朝（1837～1901）の都市の規範であり、建造物、特に公共建築の文化や審美性がその都市のシビックプライドの表現や証しとして捉えられていたと言われている<sup>5), 6)</sup>。

歴史家でジャーナリストのTristram Hunt<sup>5)</sup>は、19世紀イギリスの中産階級が、都市づく

りを支える社会的ミッションの徳を信じていたと述べ、マンチェスターのタウンホール(1877)やリヴァプールのセント・ジョージ・ホール(1854)などが公募寄付によって建設されたことなどを紹介している。ヴィクトリア朝に関する研究者であったAsa Briggs<sup>6)</sup>によると、特にリーズやブラッドフォードなどヨークシャー西部の多くの都市が連担するエリアで、それぞれの都市の確固たるシビックプライドが19世紀に特徴的であった。ヴィクトリア期のシビックプライドは「自己主張する自立の態度」<sup>6)</sup>「アーバン・アイデンティティ」<sup>5)</sup>などとも言い換えられている。一方で首都ロンドンではシビックプライドが欠如していたと言われ<sup>5)</sup>、中央に対する自立と周辺都市に対する優位を目指す地方都市に特徴的な精神であったことが窺われる。Hunt<sup>5)</sup>は、また、リーズの医師で市民名士のヒートンがタウンホール(写真1)建設を主導した際にリーズ・マーキュリー紙がシビックプライドの欠如を非難する論調を作ったことにも触れており、マスメディアを通して地域への意識を形成させるような一面もあったことを窺わせる。

## 都市環境との関係

ヴィクトリア朝末期に衰退したシビックプライドの精神が再び広く取り上げられるようになったのは、特に1990年代および2000年代のイギリスの都市再生においてである。首相であったトニー・ブレアは当時、「100年前、公共建物はしばしばイギリスの町や都市の誇りであった。(中略)強力なシビックプライドの感覚をこよなく体現するものであった」と過去を参照し、公共セクターの建築デザインの質向上の必要性を説いている。また、イギリスの旧・建築都市環境委員会(Commission for Architecture and the Built Environment, CABE)と旧・環境交通地域省(DETR)による良いアーバンデザインがもたらす価値



写真1 シビックプライドを象徴と言われるリーズのタウンホール

に関する調査報告書<sup>3)</sup>では、さまざまなステイクホルダーがアーバンデザインの効果としてシビックプライドの強化を挙げている。ヴィクトリア期に建造物がシビックプライドの象徴となったように、現代でもイギリスではシビックプライドはbuilt environment(都市環境)の質と結びつけられている。

## シビックプライドを測る

さて、「理大 科学フォーラム」誌上なので、人の感情に関わる抽象的な概念であるシビックプライドを科学的に扱うことを考えた。少なくとも客観的な指標で測れることが必要であろう。その上で、シビックプライド醸成のメカニズムを示すことを試みる。

まず、シビックプライドを測る尺度を考える。先に概観したシビックプライドの性質から、シビックプライドには地域参画、地域アイデンティティ、忠誠的愛郷心、地域愛着の側面があることが分かったので、それぞれに関わる既往研究等を参考に、表1のシビックプライド尺度を作成した。これらについて、1=まったくそう思わない~5=とてもそう思うの5件法で問うアンケート調査を行う。

また、シビックプライドは都市環境の質との関わりが強いと言われているため、都市環境がシビックプライドを高めるメカニズムを知りたい。しかし、質を直接測定するのは容

表1 シビックプライド尺度

地域参画	地域社会の一員としての責任を真剣に考えている
	自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う
	地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができていない*
	自分は地域社会に変化を起こすことができると思う
地域アイデンティティ	人生の大部分が地域に結びついている
	「(市)の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	「(地区)の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	(市)市民であることは自分にとって重要なことである
忠誠的愛郷心	この地域は、他のほとんどの地域より良い場所である
	地域を批判している人がいたら、地域を擁護する
	家族や友人に地域の産品や製品を使うよう勧める
	地域のスポーツチームを積極的に応援する(プロ、アマチュア、学校など)
地域愛着	地域は住みやすいと思う
	地域が好きだ
	地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
	地域に自分の居場所はない*
	地域にずっと住み続けたい
	地域は大切だと思う
	地域にいつまでも変わってほしくないものがある
地域になくなってしまうと悲しいものがある	

\* 逆転項目

易ではないため、ここでは、都市環境に感じられる価値体系を定量化し、それらの価値体系がどのようにシビックプライドを高めるのか、その影響をモデル化していきたい。

## 今治市の事例

愛媛県今治市を事例として、シビックプライドの定量化とモデル化を行う。シビックプライドという言葉が生まれた英米と日本とでは、市民の概念も都市と市民との関係も異なるため、自ずとシビックプライドのありようも異なると考えるのが自然だろう。英米の文献に基づいて作成されたシビックプライド尺度が、日本のシビックプライドのどのような性質を見出すのだろうか。

瀬戸内海に面する今治市は、人口15.8万人(2015年国勢調査)、2005年の市町村合併を経て、瀬戸内海に広がる島嶼部をもつ。1999年

には四国の今治市と本州の尾道市を結ぶしまなみ海道が開通し、四国の玄関口となった一方で、それまでまちの玄関口であった港の利用者は激減した。港を中心とする衰退した中心市街地の再生を図るべく、今治市は「交通」の港から「交流」の港へ」を基本コンセプトに、みなと再生に取り組み、2016年にみなと交流センターがオープンした。みなと再生の計画に携わった市民を中心とした「特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター」が、今治港、商店街エリアでのまちづくり活動を行っている。港および中心市街地活性化の取り組みの一方で、今治市では、郊外開発である今治新都市開発も進められている。

## 今治市の都市環境に対する評価

今治市内で市民認知度や市にとって重要性の高い、あるいは著名な建物・構造物・地区などの都市環境12事例(表2)について、市民評価を調査した。中心市街地、郊外、島嶼部の事例を含み、近世以前、近代初期、戦後、人口が減少に転ずる1980年代以降と、成立時期も広くカバーしている。

2016年2月に、今治市民を対象としたwebアンケート調査を行い、235人の今治市民に各事例の評価と地域に対する気持ちを回答していただいた。各事例の評価については、利用価値、歴史的価値、文化的価値、社会的価値、経済的価値、環境・景観価値、イメージ価値がそれぞれどの程度高いと思うかを聞いている。結果は、図1のようになった。各価値評価の最大値は5なので、7つの価値の総計は最大で35になる。全般的にしまなみ海道おおやまづみと大山祇神社が高く、商店街や広小路が低い傾向がある。

さて、ここで取り上げた12の事例はそれぞれ異なり、市民はそのひとつひとつを評価したのだが、彼らには潜在的な価値意識があり、それに基づいて価値評価を行っている

表2 今治市の都市環境事例

<p>1 今治市役所・公会堂・市民会館：丹下健三設計（1958）。3つの公共建築が市民広場を囲み、公共核を形成。</p> 	<p>2 しまなみ海道：1999年開通。6島を経由する全長約60kmで結ぶ架橋ルートの自動車道。徒歩・自転車も通行可。</p> 	<p>3 大山祇神社：大三島に位置する。本殿は室町中期、拜殿は江戸前期の建築でもとに重要文化財に指定。</p> 
<p>4 今治港：四国で最初に開港場の指定を受けた（1922）。かつては阪神、九州、広島方面のフェリーが発着した。</p> 	<p>5 みなと交流センター：みなと再生事業の中心施設。原広司設計、2016年オープン。</p> 	<p>6 今治市伊東豊雄建築ミュージアム：伊東豊雄設計（2011）。大三島に立地。展示やリサーチ機能をもつ。</p> 
<p>7 今治城：藤堂高虎による築城（1602）。明治維新後に内堀と一部石垣を残して取り壊されたが、1980年以降に再建。</p>	<p>8 今治銀座商店街：アーケードのかかる中心商店街。明治初期から商店が現れ、戦後区画整理で中心の商店街になった。</p>	<p>9 広小路：戦災復興の土地区画整理事業で整備された広幅員の道路。市役所の市民広場と港を結ぶ。</p>
<p>10 サイクリングターミナル サンライズ糸山：「サイクリストの聖地」とも言われるしまなみ海道の来島海峡大橋の袂に立地。1999年オープン。</p>	<p>11 新都市地区：今治ICに近接する約170haを副次核として開発。産業・居住・余暇機能等。2003年事業開始。</p>	<p>12 市制50年記念公園：1971年設置。四季の花が植えられたフラワーパークが整備されている。</p>

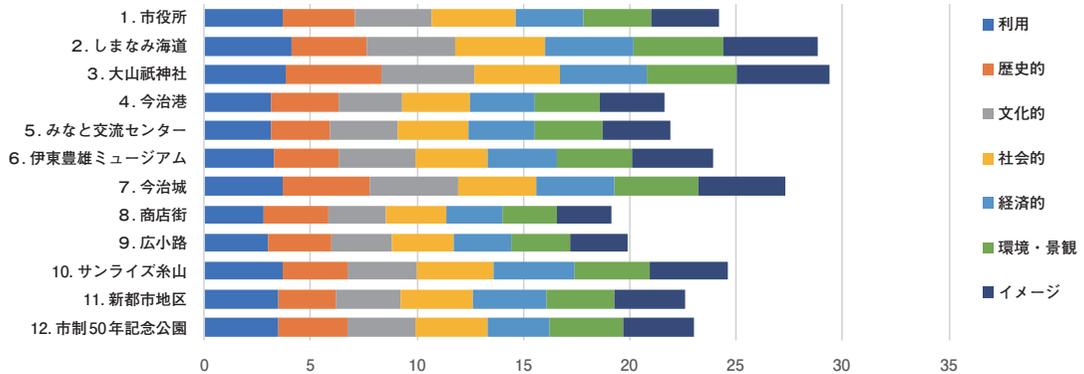


図1 都市環境事例の価値評価の平均値

考えることもできる。その潜在的な価値意識を知るために、因子分析を行う。都市環境事例の総計価値評価の因子分析によって3因子を得た。

第1因子「中心市街地」の因子負荷量が高いのはいずれも中心市街地の主要な骨格を形

成する都市環境である（商店街、広小路、市役所、港）。価値評価は相対的に低いものが多いが、社会的価値が比較的高いという共通点がある。第2因子「新規整備」ではほとんどが比較的近年に整備された施設で（新都市、みなと交流センター、サンライズ糸山、伊

東豊雄ミュージアム、市制50周年記念公園)、歴史的価値が比較的低いという共通点がある。第3因子「高評価有名地」ではいずれも市外からの訪問者も多いスポットであり(大山祇神社、しまなみ海道、今治城)、価値評価の平均値が高く、特にイメージ価値が高いという共通点がある。今治市民の都市環境評価は、「まちなか」「新しい施設」「有名なスポット」という価値意識に基づいていると言える。

---

### シビックプライド醸成のメカニズム

---

アンケートでは、表1のシビックプライド尺度を用いて地域に対する気持ちについても質問した。今治市民のシビックプライドにはどのような側面があるのかを知るために、シビックプライド尺度についても因子分析を行った結果、「愛着」「持続願望」「参画」「アイデンティティ」の4因子を得た。持続願望は既往研究で地域愛着の一部として扱われているがこれが独立し、また、欧米の論文や資料から想定した忠誠的愛郷心はここでは共通の因子として出てこなかった。

都市環境に対する評価がどのようにシビックプライドを高めるのか、そのメカニズムを知るために、共分散構造分析を行う。モデル化に際しては、以下のように潜在変数と観測変数を扱う。都市環境事例は、3因子に集約する。各事例を因子負荷量の最も大きい因子に配分し、配分された事例の平均値を各因子の評価値とする。シビックプライドについては、4つの因子と観測変数としてのシビックプライド尺度との関係を用いる。回答者属性では、性別、年齢、居住年数に加えて、活動に携わったことのある場所数「活動参加」を用いた。この値が高い人ほど地域の都市環境に積極的に関わっている人と言える。

共分散構造分析で得られたモデルを図2に示す。パスに付された値は標準化されたパス係数で、因果関係の影響の強さを示す。パス

の太さは有意水準に従い、5%水準を満たさないパスは図中に示さない。

図2からは、「愛着」をもつ地域に対して市民としての責任と役割の意識が芽生えて「参画」することで「アイデンティティ」を感じるようになる、というルートが推察される。なお、日本の別の都市での調査では、「参画」と「アイデンティティ」の影響関係が逆転しているケースもあった。

「中心市街地」の都市環境を高く評価する人ほど「参画」「持続願望」意識が高い。長年人々の生活が営まれ公私にわたって資本投下もなされてきた「中心市街地」の価値の認識は当事者意識と結びつき、「参画」意識が高まるのではないだろうか。「高評価有名地」の都市環境を高く評価する人ほど「愛着」意識が高い。「高評価有名地」は、外からの評価もあり自慢の場所になりやすいが、必ずしも自身との関係が築かれやすい場所ではないため、「愛着」は高まるが「参画」や「アイデンティティ」の高まりには直接は結びつかないようだ。

回答者属性では、居住年数が長い人ほど「アイデンティティ」「愛着」が高く、前述した「愛着」→「参画」→「アイデンティティ」の他にも、長く住まうことで自ずと育まれる「アイデンティティ」もあることが分かる。年齢の高い人ほど「参画」が高く、「アイデンティティ」「持続願望」が低い。若い人ほど「アイデンティティ」を持ちやすい傾向は、地方創成に代表されるように地域の個性を活かした自律が謳われたり地域プロモーション等が増加していることも影響しているのかもしれない。「活動参加」が多いほど「参画」が強いことは、妥当な結果と言える。

---

### 都市と市民の幸せな関係をつくる 都市づくり

---

今治の事例からは、「中心市街地」には特別な意味があり、「中心市街地」の都市環境

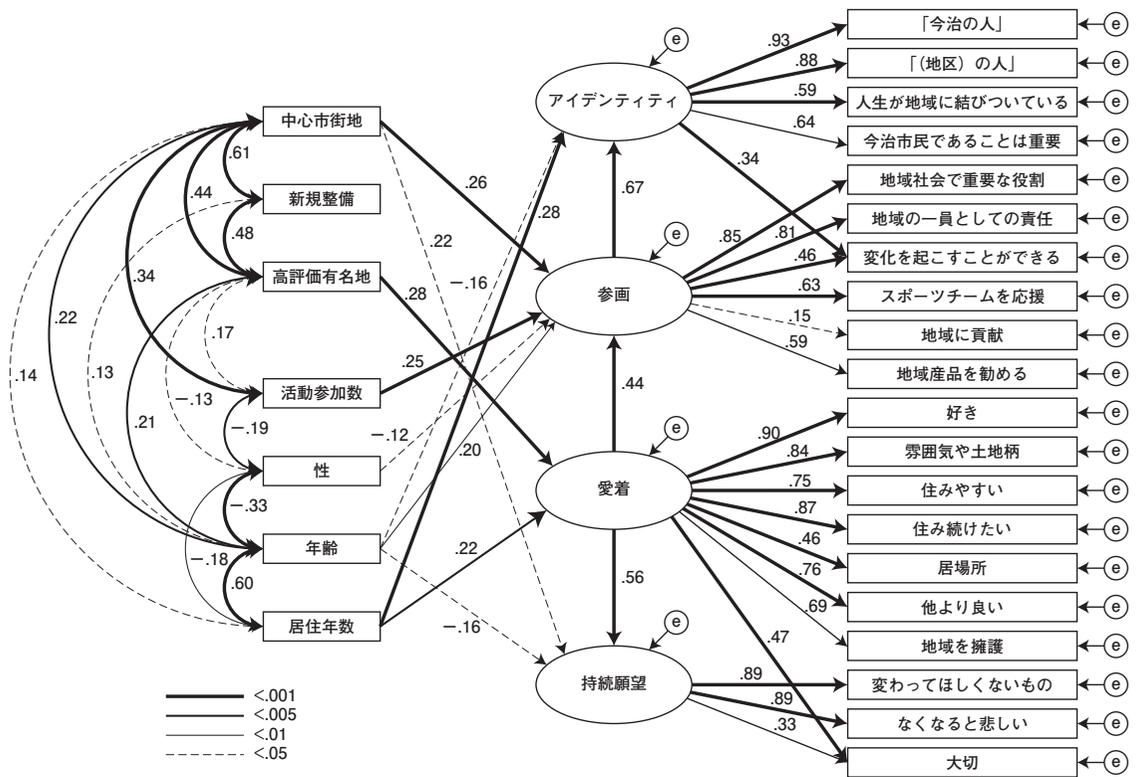


図2 都市環境に対する評価とシビックプライド醸成のメカニズム

が評価できれば「参画」「持続願望」が高まるという結果が得られた。現状ではこのような価値を認める市民が相対的に少ないため、市民の「参画」意識を育てるためには、中心市街地の魅力向上が必要だろう。一方、観光客や市外の人々にも知られているような「高評価有名地」は「愛着」を高めるという結果が得られた。有名で自慢できる場所を作り出すことで「愛着」を育み、そこから「持続願望」「参画」「アイデンティティ」に深化させていくというアプローチもありそうだ。

シビックプライドは強制できるものではないし、当然強制すべきでもない。しかし、シビックプライドが持てることは、都市にとっても市民にとっても幸せな関係性だと言える。だから、利便性や経済性だけでなく、シビックプライドが湧くような都市のあり方を考えることは、都市づくりに携わる者にとっては重要なことなのである。

## 参考文献

本稿は以下の論文を元に構成し直した。伊藤香織, 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか: 今治市を事例とした実証分析, 都市計画論文集, 52(3), 1268~1275。

- 1) Tom Collins (2017), *Governing through Civic Pride: Pride and Policy in Local Government*, Eleanor Jupp et al., *Emotional States: Sites and Spaces of Affective Governance*, 191~203, Routledge.
- 2) John Gastil and Michael Xenos (2010). *Of Attitudes and Engagement: Clarifying the Reciprocal Relationship Between Civic Attitudes and Political Participation*. *Journal of Communication* 60(2), 318~343.
- 3) CABE and DETR (2001), *The Value of Urban Design*.
- 4) Peter Groothuis, Bruce Johnson and Whitehead (2004), *Public Funding of Professional Sports Stadiums: Public Choice or Civic Pride?*, *Eastern Economic Journal* 30(4), 515~526.
- 5) Tristram Hunt (2004), *Building Jerusalem: The Rise and Fall of the Victorian City*, Weidenfeld & Nicholson.
- 6) Asa Briggs (1963), *Victorian Cities: Manchester, Leeds, Birmingham, Middlesbrough, Melbourne*, London, University of California Press.